

論文内容の要約

論文名	Napkin-ring Sign on Coronary CT Angiography for the Prediction of Acute Coronary Syndrome 急性冠症候群イベント予測における冠動脈 CT 血管造影のリング様造影効果に関する検討
氏名	大塚 憲一郎
<p>【目的】冠動脈 CT 血管造影検査 (CCTA) は冠動脈の狭窄度及び動脈硬化性プラークの性状を評価できる。CCTA におけるリング様造影効果は、急性冠症候群 (ACS) の主な前駆病変である薄い線維性被膜を有するプラークとの関連が近年報告されている。本研究の目的は、CCTA におけるリング様造影効果が ACS イベント発症の予測因子となりうるか検討することである。</p> <p>【対象】冠動脈疾患を疑い CCTA を施行し、血行再建術の必要がないと判断された 895 例を対象とした。</p> <p>【方法】895 例の対象患者を 1 年間以上追跡調査した。冠動脈を 15 セグメントに分類し、各セグメントについて閉塞性プラーク (径狭窄率$>50\%$)、陽性リモデリング (リモデリング係数>1.1)、低吸収域プラーク (CT 値 $30<\text{Hounsfield units}$) 及びリング様造影効果の有無について評価した。心臓関連死、非致死的心筋梗塞、不安定狭心症を ACS イベントとした。</p> <p>【結果】平均 2.3 年の追跡期間中、24 例に ACS イベント (1 名が心臓死、4 名が急性心筋梗塞、19 名が不安定狭心症) を認めた。単変量解析においては、閉塞性プラーク ($p<0.001$)、陽性リモデリング ($p<0.001$)、低吸収域プラーク ($p<0.001$) 及びリング様造影効果 ($p<0.001$) が、非イベント群と比較してイベント群で有意に多い結果であった。多変量解析においては、ACS 発症の独立した危険因子は陽性リモデリング ($p<0.001$)、低吸収域プラーク ($p=0.007$) 及びリング様造影効果 ($p<0.001$) であった。</p> <p>【結論】冠動脈疾患が疑われる患者において、CCTA におけるリング様造影効果は、陽性リモデリングや低吸収域プラークとは独立した ACS 発症の危険因子であった。CCTA においてこれらの特徴を認めない症例の 2 年予後は良好であった。CCTA による非侵襲的なプラークの検出は積極的内科治療を要するハイリスク患者の層別化に重要な情報を提供すると考えられる。</p>	